

研究ノート

B. Latour における人間及び 非人間への代理 (delegation) 概念の検討

柿 崎 慎 也

1. はじめに

科学と技術¹は、16世紀に始まった科学革命から産業革命を経て、相互作用しながら産業資本主義と結合することで、科学技術²として社会に定着され現代に至っている。本論考で取り上げる B. Latour は、科学について、世界と対応する言明を発見し真理として定着させるモデルと解釈している。このモデルは、自然（モノや人工物などの非人間 (non-human)、客体）と人間（主体、社会）を分離することを前提としているが、ラトゥールはこのような科学のモデルに代表される自然と人間、客体と主体との分離を「純化 (purification)」と呼び、自然と人間を両極とした二元論として、科学革命、産業革命を経て成立した科学技術の制度化を推進する原動力となった「近代」の特徴としつつ批判的に議論している。(ラトゥール2008)

「純化」による科学技術の制度化から生み出された多様な産業は、水面下で人間と非人間のハイブリッドを増殖させ、私たちの日常生活をも変化させるようになっていく。それは、人間と非人間が共に世界を作り上げているようにも思える。

本論考では、人間と非人間が共に世界を作り上げているように思える状況を解明するための端緒として、“Where Are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artefacts” (Latour 1992, 151-180) (以下、Missing Mass 論文とする) で議論されている、人間及び非人間への代理 (delegation³) 概念について、周辺の文献にも依拠しながら検討する。

タイトルにある“Missing Mass”についてラトゥールは、より明確に述べた同時期の著書の中で、下記のように記述している。

社会的な景色はフラットな「ネットワーク状の」地形を有しており、社会を作り上げる諸要素が小さな導管内を移動しているとすれば、そうした回路の網の目の合間には何があるのか…実体、面、領域、圏域が、自らが束ねて輪郭を定めるものを全部ふさいでしまうのとは

1 本論考で対象とする「技術」は、テクニックやスキルではなく、テクノロジー (technology) としての技術とする。

2 「科学技術」は和製概念であり、ラトゥールはテクノサイエンス (technoscience) を使用している。

3 「委任」、「代理派遣」とも訳される。

対照的に、ネット、ネットワーク、ワークネットは、結びつけていないものはすべて未接続のままにしている。ネットは、何よりもまず、空いた空間でできているのではないか？⁴

ラトゥールは続けてこう述べる。

社会学者が「背後に隠れたもの」を探するのは当然であったが、外部は背後にはないし、とくに隠されてもいない。それは合間にあるのであって、社会的な素材で作られたものではない。外部は隠されているのではなく、単に知られていないだけだ。それは、広大な後背地のようなものであり、一つひとつの行為の進行が成し遂げられるための資源をもたらしている。それは、都会の住人にとっての田舎によく似ている。もっと言えば、宇宙学者が宇宙の質量の推定値と観測値を合わせるために仮定したミッシング・マスによく似ている⁵。

もともと天文学用語である Missing Mass は、1980年代以前は行方不明の質量とも呼ばれたが、その後ダークマターと呼ばれるようになっていく。しかし、上記の引用からも分かるように、Missing Mass 論文における Missing Mass は、「社会を作り上げる諸要素」として人間と非人間があるとした場合に、非人間、つまり人間以外の要素が占める量のことを意味している。

Missing Mass 論文では、人間に関する分析と同様に非人間に関する分析を行う事によって「人間と非人間の集合体 (collective = 社会)」を埋める事ができると論じている。これに関連して、以下のような概念が扱われる。人間と非人間の規律、時間、空間等に関する相互の畳み込み (fold)、非人間による人間の代理や行為の指図 (prescription: それらがもつ倫理的・道徳的側面)、技術的媒介 (technological mediation) における翻訳 (translation) の重要性、能力の再分配、機械装置における行為に関するプログラムと反プログラム (anti-programs)、非人間のエージェンシー (agency = 行為者性) 等である。

これらの概念を用いてラトゥールが展開する技術論は、現代の新しい技術哲学といわれる「経験的転回」(Kroes 2000) とその後の潮流に対して大きな影響を与え、特にドン・アイディアやフェルベークらによるポスト現象学において、重要な役割を演じている。次節では、上記の諸概念の源流とも言える、ラトゥールのアクターネットワーク論の解説から始めていくこととする。

2. ラトゥールのアクターネットワーク論 (actor-network-theory; ANT) について

アクターネットワーク論 (以下、ANT とする) は、J. ロー、M. カロン、そしてラトゥール等によっ

4 ラトゥール, B., 2019. 『社会的なものを組み直す』(伊藤嘉高訳) 法政大学出版局, p.459

5 同上, p.463

て開始された、人間と非人間を共にアクター（行為者）あるいはエージェント（行為体）としてあつかう社会理論である。ラトゥールは、技術に関する技術決定論と社会決定論のいずれにも依らずに、人間と非人間のアクターによる異種混交的なアソシエーション（＝アクターネットワーク）が事象をどのように生み出しているかを探る方法論を取る。

その方法論の独自性としては、アクターネットワークの安定化と不安定化のプロセスを追跡する事、いわゆる「アクター自身に従うこと」（ラトゥール2019,27）で、その結果、技術と社会の関係を、原則として制限の無い結びつきとして動的に把握すると共に、技術的人工物の説明と技術的な行為（action）／行動（behavior）の説明とを連続的に両立させる手法にあると言える。

ANTによれば、人間も非人間もアクターとして、他のアクターとの関係を通して一時的に実体化していく。しかしながらその実体化はあくまで一時的なものであり、アクター間の関係性は常に流動的で、諸アクター間での常に新しい関係性の組み換えが行われる。こうしたアクター間の連鎖が「ネットワーク」と呼ばれるが、ここで言うネットワークのイメージはラトゥールが例に出しているように「ナイロン糸や言葉などの持続性のあるものでできているのではなく、何らかの動的なエージェントが残す痕跡からなるもの」（ラトゥール2019, 251）であり、関係性の網の目状のイメージとして捉えられる。つまり「アクターネットワーク」とは、行為の起源ではないアクターによるエージェントの繋がりとしてのネットワークである事を示しているのである。

（Callon 1987）このアクターネットワークというモデルにおいては、アクターは科学モデルのように本質を特定されておらず、常に変化しつつ一時的に実体化していくとされる。しかし、関係性が組み換えられ、ネットワークの安定が実現されるに伴い「ブラックボックス」化される。ブラックボックスは、インプットとアウトプットのみに焦点が当たる事を意味するため、内部の過程は不可視になることも意味している。言い換えれば、特定の科学や技術が定着すればするほど、不可視になってゆく。こうした不安定で不確実な実体化のプロセスがネットワークの安定化に至る際、そこに生じるブラックボックスを開きながら記述していく点も ANT の特徴である。

3. 人間への代理

ラトゥールは、代理という概念について「対立語を持たない超越性」として捉え、実存を可能にすると論じている。彼は前近代の文化には超自然的な力の浸透があり、精神と行為主体、神々と祖先とが調和していたのに対して、近代が脱魔術化と内在性に支配された世界であり、自然、社会について超越性を付与したものの、自然と社会は非人間と人間のハイブリッドであることから、実際は超越性だけが増殖する結果となった事を示す。そして、超越性そのものには対立語が無いとした上で、実存は本質からではなくプロセスや関係から出発するものであり、それは非近代的な世界を導出するとして次のように述べている。

対立語を持たない超越性を「代理」と名付けることにしよう。発話、代理、あるいはメッセージの送付、メッセンジャーの派遣は「常に現前すること」、つまり実存を可能にしている。近代世界を諦めたとき、私たちは何かの上、誰かの上に倒れ落ちるわけではない。本質ではなくプロセス、運動、経過にたどり着くのである。それは文字通り、球技におけるパスに相当するものだ。私たちは本質からではなく、いままさに進行中の不確定な実存から出発する。不確定なのは進行中だからである。久遠ではなく、いまそこに在るという状態から出発する。連鎖 (vinculum) から、そしてプロセス、関係から出発する。共同体に関わりがあり、実在であって、また言説的であるものから出発する。そうした関係から派生するもの以外は出発点とは認めないのである…意味の世界は存在の世界であり、同時に翻訳の世界、代替の世界、代理派遣の世界、「パスを送る」世界でもある。…対立語を持たない状況で超越性を探究するという試み自体が、私たちの世界を非近代的なものにする。(ラトゥール 2008, 216-217 但し、訳語は適宜変更してある)

ここで述べられている代理概念は、人間と非人間、人間と人間、非人間と非人間の間の関係性において、その関係性の中で主体性が次々に入れ替わっていく事と深く結びついていると言える。

Missing Mass 論文においてラトゥールは、人間から人間への代理について、ドアの問題から論じている。ドアを開けたままにしておくことは、壁に穴を開けたままにしておくことと同じであり、ドアを閉めるということは、壁の穴を塞ぐことを意味しているとし、そこに、ドアを開けたら閉めるという規律 (discipline) が存在していることを見出している。ドアは開閉という機能によって、ドアの内と外への出入りを制限しているが、開閉という機能に関しては、ドアのような非人間だけが持つ特性ではなく、それを取り巻く人間や人工物も含めた異種混交的な連関の効果であるとして ANT を導入している。(Latour 1992, 155)

ドアの問題は、ドアが持つ開閉の機能を使いこなす専門の人間を訓練すること = 人間から人間への代理によって解決されたように思われるが、実際には、開閉専門の人間とヒンジ (蝶番、つまり非人間) の協力 = 人間と非人間を同時に畳み込ませる事によって実現されていることでもあった。(Latour 1992, 156)

ここでラトゥールは、人間の大規模な組織化によって、人間の行動や労働が細分化されること (分業化) に関して、マンフォードのメガマシン概念⁶に言及している。(Latour 1992, 155)

マンフォードのメガマシンは、指揮系統、綿密な計画や会計処理による大量の人間の組織化であり、車輪やギアや機能やムーブメントの概念を理解する前に、まずは大規模な人間の組織化を確立する必要に迫られる。これに対し、ラトゥールは、人間の大規模な組織化こそが機械化等に

6 Lewis Mumford, "The Myth of the Machine Volume One: Technics & Human Development", Harcourt, Brace & World, 1967 (『機械の神話 - 技術と人類の発達』(樋口清訳) 河出書房新社, 1971), "The Myth of the Machine Volume Two: The Pentagon of Power", A Harvest/HBJ Book, 1970 (『権力のペンタゴン』(生田勉・木原武一訳) 河出書房新社, 1973)

よる大規模技術の雛形なのであると述べている。そして、人間及び非人間であるアクターが何を行うかを決定する行為のプログラムには、多くの入子状になったサブプログラム（文字、計数、会計等により追跡可能な）の増殖が伴うが、その一部を非人間に置き換えることによって、機械や工場、産業やオートマトンを生み出すことが可能となるとしている⁷。

このようにしてラトゥールは、人間の組織化により人間から人間への代理を行い、組織化された人間の制御のための無数のサブプログラムの置き換えとなる「技術」によって、人間から非人間への代理が行われると考える。こうした人間の組織化は、人間を特定の方向へ導くために戦略的に構築された「装置 / 仕掛け」とフーコーが呼んだものでもあり、制度や機構として人間と非人間を制御し能力の再分配を行いブラックボックス化することができる⁸。Missing Mass 論文では、ドアの問題に関して、人間と非人間の畳み込みでは十分な解決になっていないとし、その例えとして、ホテルのポーターへの規律付けの問題を取り上げている。(Latour 1992, 156) ポーターの仕事のように、退屈で低賃金な義務を確実に果たすよう若者を訓練する方法が、200年の歴史を持つ資本主義の歴史上でも未だ見つかっていないとした上で、訓練すべきは数百人ではなくたった一人だが、その一人の若者を信頼できなければ、連鎖全体が崩壊してしまうという点を指摘している。ドアを閉めさせるという単純な仕事が、信じられないほどのコストをかけて行われ、最低限の効果は最大の支出と訓練で得られることになるからであり、そしてそれは、ホテルのような集合組織でなければ取り組めないものでもあった。技術哲学者のフィーンバーグは、近代における権力のプラティク (pratique: 実践) が、パノプティコンのような人工物にも体现されていることをすでにフーコーが指摘している点に着目し以下のように述べている。

権力のプラティクは立案なき戦略であり、人間がこの戦略にコントロールされ型にはめられる際に必ず行う抵抗に対してはたらく。…プラティクは人間を訓練し、生産主体に仕立てようとするが、反抗する人々には、反復、賞罰をつうじて自らを強要しなければならない⁹。

ここで、フィーンバーグは、ラトゥールら ANT によって提案された人間と非人間の対称性に加えて、プログラムと反プログラム¹⁰の対称性が補足されなければならないと主張することで、第5節で言及する技術の民主化に関する理論への貢献を評価している。

7 Latour, B., 1994. "Pragmatogonies. A Mythical Account of How Humans and Non-humans Swap Properties" In *Humans and Others: the Concept of « Agency » and its attribution special issue of American Behavioral Sciences*, Malcolm Ashmore (editor), vol.37, n° 6, pp.791-808 [third modified part of Article (54)]

8 ラトゥール, B., 2007. 『科学論の実在 - パンドラの希望 -』 (川崎勝・平川秀幸訳) 産業図書. p.247, (Latour 1999)

9 フィーンバーグ, A., 2004. 『技術への問い』 (直江清隆訳) 岩波書店. p.162 (Feenberg 1999)

10 人間や非人間のアクターが何を行うかという行為のプログラムの予測に対して、他のアクターが異なる行為のプログラムを行う際は反プログラムを有しているとされる。そのため予測された行為のプログラムは行われない事もあるため、媒介子として「議論を呼ぶ事実」を能動的に付与する。

4. 2つの代理制

ラトゥールは、純化による非人間としての自然と人間（社会）の分離について、科学者は自然を、政治家は社会をそれぞれ代理するのだと論じており、その具体例として17世紀のロバート・ボイルとトマス・ホップスの論争を取り上げている。(ラトゥール 2008) この論争については、シェイピンとシャッフアーによる著書¹¹で既に論じられているが、ラトゥールは次のように述べて両者を批判している。

シェイピンとシェイファーは空気ポンプの進化、浸透、大衆化に関しては達人の域の解体作業を見せておきながら、“権力”や“支配力”の進化、浸透、大衆化に関しては解体の気配すら見せない。それはどうしてなのか。“支配力”には、空気バネほどの問題はないと考えているのだろうか。自然と認識論が超歴史の実体によってつくられたのではないとしたら、歴史や社会学だってそのようには作られていない¹²。

自然と人間（社会）の分離には、同時に、人間から人間への代理の進展という結果が伴うのであり、それによってまた、自然から分離された人間（社会）というものが創造されるのだ。こうしたプロセスを彼は「純化」と呼んでいる。つまり近代は、人間と非人間を分離する事で科学と代議制民主主義という2つの代理制を生み出し、自然と社会について、それぞれを対象として言表する事を可能としたのである。ラトゥールは以下のように述べる。

ボイルは科学の言説だけを作り出したわけではない。ホップズもただ政治の言説を書き連ねたわけではない。ボイルは同時に、政治を排除する政治的言説を産み出し、ホップズは彼なりの科学政治をイメージして、実験科学をそこから排除すべきだと主張した。つまりそれは二人が近代世界を創り出したということだ。実験室を媒介とした“モノ”の代理制と社会契約を通した市民の代理制が永久に交わることのない世界を創り出したのである¹³。

ラトゥールの議論に従うならば、近代というものの実質は人間と非人間のハイブリッドなネットワークに他ならないわけだが、そのネットワークを、人間を主体、非人間を客体として捉えるだけの装置として、代理という概念が生み出されたのである。また、人間はハイブリッドを自然と社会に純化することで近代を実践してきたが、実際の人間と非人間は、純化の両極のいずれにだけ存在するものではなく、純化による分離よりむしろハイブリッドの増大に取り組んできたか

11 シェイピン,S. & シャッフアー,S. 2016.『リヴァイアサンと空気ポンプ—ホップズ, ボイル, 実験的生活—(吉本秀之の監訳)(柴田和宏・坂本邦暢訳)名古屋大学出版会,(Shapin & Schaffer 1985)

12 ラトゥール,B., 2008.『虚構の近代—科学人類学は警告する—』(川村久美子訳)産新評論,p.55,(Latour 1997)

13 同上,p.56

らであると言える。

5. 非人間への代理

人間から非人間への代理を考える上で重要なのが、ラトゥールの「翻訳」概念である。翻訳は近代の特徴である純化と同時に働き、純化とは相互作用の関係にある。ラトゥールは翻訳概念について次のように述べる。

翻訳とは、ある原因を〔象徴的なものなどに〕移送する関係ではなく、二つの媒介子¹⁴の共存を引き起こす関係である。なんらかの原因が予測どおりにいつも同じように移送されるように見えるならば、それは移動が円滑かつ予測どおりに行われるために、他の諸々の媒介子がうまく置かれていることの証左である。…つまり、社会も社会的領域も社会的紐帯もないが、たどることが可能な連関を生み出すであろう媒介子のあいだでの翻訳がある¹⁵。

ラトゥールは翻訳概念について、翻訳は、それまで関係のなかった人間や非人間のアクターの新たな連関 (association) を生じさせるものであり、これを彼は中間項¹⁶の媒介子化と呼んでいる。すなわち「ある行為が生じるために必要不可欠な媒介項としての役割を果たす他のアクターを経由するあらゆる配置を指示」する。そしてその結果として生成される媒介子の連鎖 = アクターネットワークそのものが、「アクターが多様で相矛盾する諸々の利害関心を修正し、配置を換え、翻訳する作業を指示している」のである。(Latour 2007, 404) つまり、翻訳とは中間項の媒介子化であると同時に、人間や非人間のアクターの連関におけるラトゥールが言うところの命題 (proposition) の分節化 (articulation) を促す。ラトゥールは命題について、真偽の判断に関わる認識論的意味ではなく、「あるアクターが他のアクターに何を提供するかという存在論的意味で」(ラトゥール 2007) 用いている。例えば、バストゥールによる乳酸発酵素発見のプロセスについて下記のように述べている。

バストゥールがより多くの作業を行うほど、乳酸発酵素はより独立するようになる。というのも、いまや、実験室の人工的設定のおかげで、発酵素そのものとは決して類似していない命題が極めて多数分節化されるからである。乳酸発酵素は、いまや、非常に多数の能動的か

14 mediation (媒介項とも訳される)。インプットとアウトプットでは厳密に定義できない事象ないしアクターを意味する。

15 ラトゥール, B., 2019. 『社会的なものを組み直す』 (伊藤嘉高訳) 法政大学出版局, p.203-204, (Latour 2005)

16 中間項 ((仲介子, 仲介項とも訳される) intermediary) はその原因によって完全に定義できるのに対し、媒介項は常に前提条件を凌駕する。(ラトゥール, B. (2007) 『科学論の实在 - パンドラの希望 -』 (川崎勝・平川幸幸訳) 産業図書, (Latour 1999))

つ人工的な状況の中で、他に非常に多数の実体の間で分節化されているのであるから、分離した実態として存在しているのだ。(ラトゥール2007, 183-184。傍点は原著者による)

また、分節化については、最初は不明確、不確定な人間や非人間のアクター間の関係が、中間項の媒介子化によってアクターネットワークが生成されるプロセスそのものを示していると言っ
てよいと考えられる。

このプロセスについて、ラトゥールは「議論を呼ぶ事実 (matter of concern)」から「厳然たる
事実 (matter of fact)」への移行とも表現している。(Latour 1991) つまり、近代の科学モデルの
ように、自然 (非人間) を客体として捉え、そこにある本質や真理としての対象と表象の対応を
探究するのとは対照的に、最初は不明確、不確定な人間や非人間のアクター間の関係 (「議論を
呼ぶ事実」) が、人間と非人間 (自然) の集合体 (= 社会) における、新しい関係性を確定させ
ていく (「厳然たる事実」) 連鎖的な運動そのものを重要視しているのである。そのプロセスはま
た、集合体 (= 社会) における命題 (= アクター) の実体化そのものとも言える。

ラトゥールは Missing Mass 論文において、上記の翻訳概念を前提にしつつ、人間から非人間
への代理について、人間と非人間の対称性の議論から展開している。まず、熟練していない非人
間は、熟練した人間のユーザーを前提としており、それは常にトレードオフ関係にあると述べて
いる。つまり、非人間を人間の位置に引き上げるのではなく、脱技術化した人間を引き下げた分
だけスキルアップした非人間を引き上げることで、人間と非人間を対称的に捉えることが可能
になると論じる。(Latour 2008, 157)

ラトゥールは更に、人間にのみ主体性を認めることと、非人間には客体性しか付与しない事を
否定して、デカルト的な二元論 (二項対立) (cartesian dichotomy) を退け、非人間を意図的な行
為の主体 (「人間と非人間は同等」という誤解¹⁷の原因) とせず、行為における意図と結果を切
り離すことによって「近代」的な諸概念を用いない人間と非人間の関係や集合体の記述を試みる
のである。もちろん、命題の分節化のところでも述べたように、中間項の媒介子化のプロセスで、
両者が主体と客体として表現される状態が一時的に生じる可能性があることはここでも否定して
いない。

フィーンバーグは、ラトゥールの人間から非人間への代理について技術的媒介の概念の視点か
ら次のような批判を行っている。

構造や機能によって道徳的義務を守らせるような装置に規範が「代理」される (中略)。しかし、
装置が社会的ルールを規定する場合には、その規範性を簡単に片付けてしまうことはできな
い¹⁸。

17 actor の解釈の誤解, actant という記号論的な用語へ置き換え可能。

18 フィーンバーグ, A., 2004. 『技術への問い』 (直江清隆訳) 岩波書店, p.149, (Feenberg 1999)

装置のような非人間への人間からの代理においては、ラトウールによれば、人間から人間への代理の場合と同様に、技術的媒介によって、装置に「指図・規範」を埋め込む事が可能であるとされる。これに対してフィーンバーグは、人間から非人間への、設計者の意図などによる規範の埋め込みと、非人間から人間への、設計者の意図にかかわらず、行為者がそのように行為せざるをえない技術的なふるまいの規範の埋め込みを判別した上で、下記のように解説している。

私は、…人間以外の代理者から人間に対して課せられる行動を指図 (prescription) とよぶ。指図は機械装置に備わった道徳的、倫理的な次元である。…機械ほどに容赦なく道徳的な人間はいない。何世紀もまえから知っているように、われわれは人間以外のものに力を代理させるが、それだけでなく、価値や義務、倫理を代理させることもできる。われわれ人間は、自分がいかに弱くまた邪悪なものだと感じているとしても、こうした道徳性ゆえに倫理的にふるまうのである¹⁹。

また、人間と非人間のハイブリッド (=アクターネットワーク) による集合体 (=社会) においては、非人間による代理を実現する技術的媒介とそれを可能にする翻訳こそが、フィーンバーグが言うところの社会的結合を実現するコミュニケーションに並ぶ重要な要素であることが下記のように述べられている。

社会的結合が技術的指図に依存するのは、伝統や法、言葉による同意それ自身は複雑な社会をまとめるのに十分ではないからである。このように社会的結合は、人間のコミュニケーションとともに、独特のかたちでの規範性を支える技術的対象に媒介されるのである²⁰。

フィーンバーグは、『技術への問い』(2004) の中で、社会構成主義を参照しながら「技術決定論」と「技術本質主義」の双方を退け、技術が効率性、合理性に基づいて単線的に進歩するものではなく、社会に条件づけられ、社会システムが異なれば別の役割を果たすよう再構成されるとする。アクターネットワーク理論については「ラトウールは、著者と読者が印刷物において出会うのとまったく同じように、機械のつくり手と使い手は機械を利用する場でつなぎ合わされると主張する。機械はテキストと比較することができる。なぜなら、この両者はともに「物語」、言い換えれば、使い手が開始し、経験する、指図に従った一連の出来事を記しているからである。」²¹と述べている。その上で、「技術がそれほど大きな力をもつとすれば、他の政治制度にあてはめているのと同じ

19 同上, p.149

20 同上, p.150

21 同上, p.68

民主主義の基準をどうして技術に適用しないのだろうか²²と問いかけ、効率性の神話の否定そのものが技術的社会における民主主義の回復につながるとして、社会の民主化には政治的な変化と共に技術的な変化が必要であるとする「民主的な合理化 (Democratic Rationalization)」の概念を主張している。

フィンバークは「民主的な合理化」に関して、ラトゥールの代理理論における「技術的媒介による人間から非人間への代理」が「規範の代理」を意味していると捉えており、非人間に埋め込まれた「指図・規範」を設計する事が、「技術の支配」であるテクノクラシーに対抗するための一つの戦略になりうると考えている事がわかる。言い換えると、民主的なプロセスによって「指図・規範」を技術に内在化させていくことで、非人間と人間の双方を変化させていくことが可能になり、それはまた、テクノクラシーを正統化する技術の代理という側面を排していくことにもつながっていくと捉えられる。

ラトゥールによる人間から非人間への代理における、指図・規範もまた、アクターネットワークを生成するアクター間の関係の連鎖の中で変化していくものである。その過程ではフィンバークの言う「民主的な合理化」を生み出す場合もあればテクノクラシー的なヒエラルキーを生み出す場合もあると考えられるため、「指図・規範」の設計が重要になる。その「設計」の部分については、技術哲学者のフェルベークによる技術的媒介の概念も参照しておく事とする。フェルベークの「技術的媒介」概念は、技術が人間の行為や目的を媒介し、アクターとしての新たなエージェンシー (agency) の獲得をもたらすものとして提示されている。ANTを援用して「技術を、道徳的道具でも道徳的行為者でもなく、道徳的媒介項として捉えることが可能である²³」とし、人間と技術を特定の関係へと導くとされている。更にフェルベークは、フーコーの参照により自由を技術との関係において再定義しており、「使用の文脈」と「設計の文脈」という2つの道筋で「技術的媒介」との関係構築していく事を提示している。「設計」の概念については設計者としての技術者の責任と技術の「設計」が本質的に道徳的な活動としている。しかしながら、設計において使用を設計(ないし想定、想像)することと、使用を分析することの位相については未だ課題が残されている。

6. ま と め

ここまで、ラトゥールの代理概念について、人間への代理(ドアの問題、代議制民主主義等)と非人間への代理(科学、技術等)について、近代批判とアクターネットワーク理論を軸に考察してきた。「代理」は、「技術」と一体となり、人間と非人間、社会と自然を分断する「純化」を進める働きのように一面的には捉えられるが、実際は、不安定且つ不確定な現実から、「翻訳」

²² 同上, p.191

²³ フェルベーク P., (2015)『技術の道徳化』(鈴木俊洋訳)法政大学出版局, p.93

による「分節化」とフィーンバーグやフェルベークが指摘しているような、「指図・規範」の非人間への柔軟な埋め込みによって、人間と非人間がハイブリットな存在として相互に畳み込み合っている関係を生み出す原動力になっていると考えられる。

また、ラトゥールの代理概念は、近代においては純化と相互作用しながら、翻訳による分節化を促進し、同時にそれは人間と非人間のハイブリッドを無数に産出していく事も意味していた。それは、言い換えると、非人間（自然）と人間（社会）を分離する純化と、代理と翻訳による非人間（自然）と人間（社会）のハイブリッド化の両立を否定する事によって、「近代」と言う概念が虚構である事を示す試みでもあることが判明した。

また、最後に、Missing Mass 論文に関連した論文²⁴が掲載されている “Shaping Technology/ Building Society Studies in Sociotechnical Change” にラトゥールと共著で執筆もしているアクリッチの、代理に関する研究にも補足的に言及する事とする。アクリッチは、代理について、人間からモノに人間の目的や機能を与える事であり、その目的や機能を「銘刻 (inscription)」として、ラトゥールが言うところの非人間に埋め込まれている「指図・規範」との対抗関係が生じると指摘している。アクリッチはコートジボワールでの電気供給システムと市民の受容プロセスや、太陽電池式照明キットと利用者との関係の分析を通して、非人間としての技術に埋め込まれた「指図・規範」に対する住民や利用者の「不正」や「改造」によって生じた対抗関係によって、人間から非人間への代理と非人間から人間への代理がそのまま、人間と非人間が相互に構成し合う関係 (=秩序の再構築) を生じさせるという議論を展開している。これは、ラトゥールが人間と非人間が共にハイブリッドな存在であり、相互に代理し合う事によって人間も非人間も区別なくアクターネットワークを作り出し、集合体 (collective) としての社会を構築しているとする議論と共鳴するものである。

今後は、ラトゥールの人間と非人間による「代理」と「技術」概念の関係について更に研究を深めつつ、ANT を拡張する動きとしての社会学や人類学に関する動向も確認していくと共に、近代「産業」を生み出してきたプロセスについて批判的に検討することで、「産業」概念の更新に取り組んでいく予定である。

参考文献

シェイピン,S. & シャッフアー,S., 2016. 『リヴァイアサンと空気ポンプ—ホップズ, ボイル, 実験的生活—』 (吉本秀之監訳) (柴田和宏・坂本邦暢訳) 名古屋大学出版会, (Shapin & Schaffer 1985)

24 Madeleine Akrich, Bruno Latour, “A Summary of a Convenient Vocabulary for the Semiotics of Human and Nonhuman Assemblies,” Bijker, W. & Law, J., *Shaping Technology/ Building Society Studies in Sociotechnical Change*, The MIT Press, pp.259-264, 1992.

- ラトゥール, B. (2019) 『社会的なものを組み直す』 (伊藤嘉高訳) 法政大学出局, (Latour 2005)
- ラトゥール, B. (2007) 『科学論の実在—パンドラの希望—』 (川崎勝・平川秀幸訳) 産業図書, (Latour 1999)
- ラトゥール, B. (2008) 『虚構の近代—科学人類学は警告する—』 (川村久美子訳) 産新評論, (Latour 1997)
- フィンバーグ, A. (2004) 『技術への問い』 (直江清隆訳) 岩波書店
- フェルベーク, P. (2015) 『技術の道德化』 (鈴木俊洋訳) 法政大学出版局
- フォーコー, M. (1986) 『知への意志』 (『性の歴史』 I) (渡辺守章訳) 新潮社
- Callon, Michel (1987) . Society in the making: The study of technology as a tool for sociological analysis. In T. Huges, & T. Pinch (Eds.) , The social construction of technological systems: New directions in the sociology and history of technology (pp. 83-103) . London: MIT Press.
- Latour, Bruno (1994) . “Pragmatogonies. A Mythical Account of How Humans and Non-humans Swap Properties” In Humans and Others: the Concept of « Agency” and its attribution special issue of American Behavioral Sciences, Malcolm Ashmore (editor) , vol.37, n° 6, pp.791-808 [third modified part of Article (54)]
- Latour, Bruno (2008) . “Where Are the Missing Masses ? The Sociology of a Few Mundane Artefacts,” in Johnson, Deborah G, and Jameson M Wetmore, eds., *Technology and Society, Building Our Sociotechnical Future*. Cambridge, Mass: MIT Press, pp.151-180.
<http://www.bruno-latour.fr/node/258>
[original published (1992) . in Wiebe Bijker and John Law, eds., *Shaping Technology/Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, Cambridge, Mass: MIT Press, pp. 225-259.]
- Madeleine Akrich, Bruno Latour. “A Summary of a Convenient Vocabulary for the Semiotics of Human and Nonhuman Assemblies,” Bijker, W. & Law, J., *Shaping Technology/Building Society Studies in Sociotechnical Change*, The MIT Press, pp.259-264, 1992.
- Mumford, Lewis (1967) . “The Myth of the Machine Volume One: Technics & Human Development” , Harcourt, Brace & World, (『機械の神話—技術と人類の発達』 (樋口清訳) 河出書房新社 ,1971), “The Myth of the Machine Volume Two: The Pentagon of Power”, A Harvest/HBJ Book, 1970 (『権力のペンタゴン』 (生田勉・木原武一訳) 河出書房新社 ,1973)
- Verbeek, Peter-Paul (2005) “What Things Do: Philosophical Reflections on Technology, Agency, And Design” Penn State University Press.

謝辞

本論考は2021年5月から12月にかけて、東日本大震災・原子力災害伝承館常任研究員である山田

修司氏との“Where Are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artefacts”に関する読書会での議論の成果の一つである。ここに同氏に感謝の意を評する。

Examination of the Concept of Agency (delegation) for Humans and Non-Humans in Bruno Latour

Shinya KAKIZAKI

This paper examines the concept of delegation to humans and non-humans as discussed in Bruno Latour's 1992 paper, "Where Are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artifacts". In this paper, Latour argues that we can fill in the "collective of humans and non-humans" by conducting an analysis of non-humans as well as humans, and through the mutual convolution of humans and non-humans (discipline, time, space, etc.) we can understand the concept of delegation of humans by non-humans. He discusses the importance of delegation and prescriptions of action (ethical and moral aspects: prescriptions) , the importance of translation in technological mediation, the redistribution of capabilities, programs of action and anti-programs in mechanical devices, and the role of non-humans in the development of society.

Latour's theory of technology has greatly influenced the "empirical turn" (Kroes 2000) and subsequent trends in contemporary new philosophy of technology, especially in the post-phenomenology of P. Verbeek and others, where it is positioned as a core theoretical pillar along with D. Idhe and subsequent trends. This paper is one of the most important references on the mediating function of technology (technological mediation) . This discussion will focus on the concept of delegation as a scription in human-nonhuman relationships.